



TITLE:

# 京都大学言語学懇話会 1997年度活動報告

AUTHOR(S):

---

CITATION:

京都大学言語学懇話会 1997年度活動報告. 言語学研究 1997, 16: 211-222

ISSUE DATE:

1997-12-24

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/88003>

RIGHT:

京都大学言語学懇話会  
1 9 9 7 年度活動報告

### 第43回例会

1997年4月12日(土) 午後1:30~4:45

京大会館102号室

研究発表

「素性照合と形態併合:古典的類型論とパラミター統語論の接点を求めて」

酒井 弘 (広島大学)

「言語教育と日本語」

森本 順子 (京都教育大学)

### 第44回例会

1997年7月5日(土) 午後1:30~4:45

京大会館102号室

研究発表

「意味記述の基礎に関する若干の考察」

田野村 忠温 (大阪外国語大学)

「フルフルデ語と口頭伝承」

江口 一久 (国立民族学博物館)

### 第13回大会(第45回例会)

1997年12月13日(土) 午前11:00~午後5:00

京大会館102号室

研究発表

「フランス語の非再帰形人称代名詞クリティックの認可条件について」

藤田 健 (室蘭工業大学)

「なぜ自然談話データが文法研究に必要な?:

言語学におけるデータの問題」

北野 浩章 (東北大学)

「朝鮮語情報処理事始め」

油谷 幸利 (同志社大学)

「印欧語的英語研究への道程

わが研究の彷徨史」

岩本 忠 (京都産業大学)

「俗ラテン語研究をめぐって」

矢島 猷三 (愛知県立大学)

## 素性照合と形態併合

### ー古典的類型論とパラミター統語論の接点を求めてー

酒井 弘

19世紀初頭、F. Schlegel(1808)は、諸言語には2次的意味をマークする方法として、「語幹の内的変化」すなわち屈折による場合と、「独立の語の追加」すなわち膠着による場合があることを指摘し、この二つが世界のすべての言語を分類する基準となると主張した。このような古典的類型論の主張は、その後さまざまな批判を受けたが、言語の多様性を直観的に捉える魅力を今なお保ち続けている。一方、現代の言語理論である生成文法においては、言語間の相違は普遍文法に備え付けられたパラミターの値を変更することによって生じると主張され、このような仮説に基づく言語の多様性に対するアプローチは、比較統語論（またはパラミター統語論）と呼ばれている。本論文においては、Chomsky(1995)において提案された Formal Features（再帰的統語操作の対象となる素性のこと：以下 FF と略記する）の理論を採用しつつ、FF が付与される要素についてのパラミターを独自に提案することで、古典的類型論の洞察を比較統語論の中に取り入れることを試みる。提案されたパラミターを組み込んだ理論は、膠着性と統語的移動の有無の間に、「ある FF が関与する現象において膠着性を示す言語では、当該の現象において移動が起こることはあり得ない」という重要な相関関係を予測する。この予測の妥当性は、多数の言語の詳細な分析を通して検証されるべきものであるが、その第一段階として、「動詞形態において明らかな膠着性を示す日本語においては、動詞の統語的移動は存在しない」という主張を検討する。具体的には、法助動詞（主節述語）が動詞（従属節述語）とともに複合述語を形成する「少しも雨が降らないようだ。」のような構文を取り上げ、否定辞を含む従属節述語が主節へ移動しているならば、否定極性表現「少しも」を主節において解釈できるはずであるが、そのような解釈が許されないことから、複合述語の形成には動詞移動が関与していないと議論する。

（さかい ひろむ、広島大学教育学部）

## 言語教育と日本語

森本順子

外国人にたいする日本語教育は、近年盛んになってきたが、日本語教育に実際に携わっている人以外には、どのようなことをしているのか、どのような問題があるのかなど意外に知られていない。ここでは、日本語教育における問題を取り上げたが、特に新しい研究の発表ではない。誤用の面から、すでに現場では周知の日本語の表現に関する問題を具体的に取り上げて、紹介したものである。

いうまでもなく、誤用の問題は、言語のすべてのレベルにおいて生じ、また単独に起こるわけではなく、音声とシンタックスのからみなど、複合的な視点からみる必要もある。たとえば、「いく」「くる」のようなダイクティックな動詞は、言語により意味の構造が異なり、混乱を引き起こすが、必ずしも意味のレベルとはかぎらず、音声面での聞き取りの力にかかっている可能性もある。

また、シンタックスと語用論がからむ例として、授受動詞（あげる、やる、くれる、もらう）を取り上げた。授受動詞の用法は、単なる語彙の問題ではない。日本語の敬語システムの基本である内外の関係にもとづく授受動詞の統辞論的性格（＊橋本さんは、わたしに名刺をあげた）、受益表現としての授受動詞と受動態、使役態との関わり（例：漢字の間違いは、彼に、直してもらった／直された／直させた）、受益表現における人間関係および言語慣習の問題（例：＊先生に手紙を書いてあげます）、授受動詞のダイクティックな特徴（例：欠席した分のノートは友達が見せた／見せてくれた）など、それぞれの面で生じる誤用の類型と、日本語教育での扱い方についてのべた。

（もりもと　じゅんこ　京都教育大学）

## 意味記述の基礎に関する若干の考察

田野村 忠温

### I 意味研究をめぐる疑問・反省

本発表においてはまず、意味論の過去と現在を見渡すときに発表者の感じる大きな問題点について述べた。一言で言えば、意味の研究が盛んに行れるようになった昨今においても、意味論の全体像は依然として不明瞭で、それが明らかになる兆しも認められないということである。意味論の概説書の類は数多く出版されるが、概して種々の話題の寄せ集めという印象を免れない。

これは詮ずるところ意味なる概念そのものの不明瞭さに起因するものとは言えようが、それだけではなく、研究成果の蓄積性という点から見ても意味論の現状には問題があることも指摘せざるを得ない。ある時期に競って研究され論争が展開されたテーマが特に決着を見ることもなく人々から見向きもされなくなるというケースが珍しくない。それだけの理由でそうした研究が無価値ということにはならないにしても、言語学の歴史における意味論の進歩という観点をそれぞれの意味論研究者が従来以上に自覚することが重要であろう。

### II 意味研究の資料の問題 コーパス利用の意義

続いて、言語表現の意味の分析・記述の基礎となる資料の問題について考察した。発表者は、パソコン用のCD-ROMドライブ装置が世間に出回り始めた1992年ごろ、やはり当時出始めていた新聞記事データベースCD-ROMを日本語研究に利用することを構想し、以来、日本語研究に電子コーパスを利用するための様々な手法やソフトウェアを考案・開発するとともに、具体的な事例の分析を通してコーパスを利用した日本語研究の可能性と問題点を検討してきた。そうした研究を通して明らかになったのは、大規模なコーパスを利用することのメリットは予想をはるかに上回るものであるということであった。ここでは以下の3つのテーマについて述べた。

#### 1 内省に依存した研究の限界

現代語、特に母語の研究における内省の活用の有効性には疑問の余地がない。しかし、有効であることは万能であることを意味しない。内省に過度に依存した言語研究にどのような問題点があるかを指摘した。

#### 2 コーパスに基づく意味研究のメリット

言語表現の意味の分析・記述を内省だけに頼らずコーパスを利用して行うことのメリットをいくつかの角度から一般論として述べた。

#### 3 事例研究

いくつかの意味分析の事例を紹介し、大規模なコーパスの利用が意味の分析・記述をどのように益するものであるかを具体的に示した。

(たのむら たはる、大阪外国語大学)

藤田 健

フランス語において目的語として機能する非再帰形クリティックは、それを項としてとる動詞にクリティック化する。しかし、単文構造では現れない非再帰形目的語クリティックの興味深い特徴がある。それは、不定詞句を含む複文構造におけるクリティック化である。特に、動詞“faire”が用いられる、倒置を含む使役構文では、クリティック化に関して他の構文とは大きな違いが見られる。それは、目的語を項としてとる補文の動詞ではなく、主文の定動詞である使役動詞にクリティック化しなければならないという点である。更に注目すべきは、直接目的語の場合には補文の主語である被使役者名詞句の降格の有無に関わらず主文の動詞にクリティック化しさえすれば文法的であるのに対し、間接目的語の場合には補文の主語が降格し前置詞“par”によってマークされていなければ主文の動詞にクリティック化しても非文となる。

従来はこのような現象に対して、直接目的語クリティックと間接目的語クリティックの認可条件を別々に設定するという分析がなされたが、なぜ両者の認可条件が異なるのかという理論的な動機付けがなされないままであった。本発表では、このような疑問に答えるため、まず被使役者名詞句のマーキングの複雑さに対して一貫した説明を与えるフランス語の使役構文の構造を提示した。すなわち、(a)使役構文の補文は TP を含まない、(b)使役構文において、動詞“faire”は補文の動詞の格照合能力を吸収するため、補文の動詞は overt syntax において“faire”と  $X_0$  移動による統語的複合動詞を形成する、という二つの特徴をもつ構造である。

この構造に基づいて、目的語クリティックの認可条件は、直接目的語、間接目的語とも共通していると提案した。すなわち、非再帰形目的語クリティックは overt syntax において、(a)動詞複合体に編入されねばならない、(b)格照合を受けねばならない、というものである。そして、間接目的語クリティックの分布が制限されるのは、それぞれのクリティックが格照合を受ける構造的位置の違いによって生じることを示した。すなわち、直接目的語クリティックは VP-shell 構造の下位の動詞句で照合されるのに対し、間接目的語クリティックは上位の動詞句で照合されるのである。間接目的語クリティックの分布が制限されるのは、補文の動詞句内から主文の上位の動詞句への移動が最小連結条件に違反するためであると説明される。このように考えれば、両者に対して理論的動機付けがない異なった認可条件を仮定することなく、極めて一般的な原理によって、両者の分布の違いが簡潔に説明される。

(ふじた たけし、室蘭工業大学)